

## 藤樹人間学習会： 藤樹思想を学び考え実践する

田中 清行

四年前から始めた本学習会の内容を本会報の毎号で紹介します。

昨年十二月から『大学解・通解』を学んでいます。

五月十三日（水）夜、安曇川公民館で第45回学習会を行いました。

最初にTVで視聴したベトナムの禅僧、テイク・ナット・ハン師の話をしました。師は、コップの水とろうそくとマッチを使って、私たちのいのちは雲とコップの水の関係のように連綿とつながっていること、いのちはマッチで火を点けるように何かの条件が満たされたとき生まれ、条件がなくなると死ぬが、死は無ではなく、現実世界の中では見えていないだけだ。



この考え及び以下に述べる大乘

仏教の思想は藤樹先生の「孝」の思想と繋がっているのではないかと思いますが、『大学』

素読の後、明德、親民、至善について、先生の主意を読み、当時の時代背景やその教えが永続している理由等について皆で話し合いました。

六月から曜日、時間を変更して土曜日六日の午後、ウエストレークホテルで第46回学習会を行いました。

最初に次のように話しました。TVで日本仏教のあゆみを視聴。聖徳太子以来、日本では大乘仏教が広まりました。根本は、仏の大悲があらゆる人々の脚下に届いている。そのことを信ずれば、苦行によらずとも救われると受けとめられてきた。また、仏に抱かれて自己を自覚すれば、同じ存在である他者への尊敬も出来るようになる。日本の仏教徒の多くが以下に述べる大乘仏教の思想によっています。

その後、『大学』を素読後、教本「止まるを知りて後定まるあり。定まりて後よく静かなり。静かにして後よく安し。安くして後よく慮る。慮りて後よく得」を学びました。この中の「止まる」の意味は止揚ではないかと皆で話し合いました。その後、懇親会で楽しみました。

七月四日（土）、安曇川公民館で第47回学習会を行いました。

最初に次のように話しました。空海の密教の教えは、人や動物は大自然の中で一つの同じ生命を生きている。生死を考えると、大自然

の言葉を聴き、その生命をつないでいく。継承の中に幸せがある。「利他」の心が大切。

教本について「物に本末有り。事に終始有り。先後する所を知らば、即ち道に近し」のところを学びました。フリートリーキングでは「徳とは何か？」等について話し合いました。

八月一日（土）午後、安曇川公民館で第48回学習会を行いました。最初に次のように話しました。浄土教は、阿弥陀仏の本願が根本になっています。人間というものはいくら努力しても煩惱から逃れられない存在である。自力ではどうしても救われない存在である自分に絶望した挙句、仏から慈悲を受けている存在であることに気づき、それを信ずることにより救われる。そういう他力を教えているのが浄土教でしょう。

教本について「古の明德を明らかにせんと欲する者は、治国↓齊家↓修身↓正心↓誠意↓致知↓格物に有り」を学びました。すべてが格物につながっており、格物は五事を正すことです。

児童虐待等の現実をみると、五事を正す教育がいかに大切であるか等について話し合いました。

## 「藤樹紙芝居」の紹介③

### 『馬方又左衛門』

（解説）

「正直で誠実な馬方又左衛門」として名を残した若者は、西近江路の川原市（現高島市新旭町安井川）に実在した『中西又左衛門』という人です。豪農で広い田を家族と耕作するかたわら、人や荷物を運ぶ馬方の仕事をしていたので、又左衛門は、時間があると、夜は、小川村の藤樹書院に通い、先生の『良知の教え』を学びました。父の後を継いで家業に勤しみ、晩年は、川原市の庄屋を務めた徳の厚いりっぱな人であったと伝えられています。

このお話の後半に登場する『藤樹先生』は、細々と一人住まいをしていた母に孝養を尽くすため、四国の大洲藩を脱藩して生まれ故郷の小川村にもどって来ました。先生の学徳を慕って、大洲や京都、近江各地から、門人たちが学問所（現在の藤樹書院）で勉学に励んでいました。先生は門人だけでなく、村人たちにも心のもち方や、人間としての生き方を教えました。又左衛門も、そのひとりです。藤樹先生の『良知の教え』を学び大切に暮らしていたのです。



物語は、馬方又左衛門が、殿様の命令を受けた加賀の飛脚を、川